

京都連合教職大学院におけるカリキュラム改革の成果と課題 —授業力高度化コースを中心に—

井上 雅彦・杉本 和彦・浅井 和行・内海 成治・小川 比呂志
児玉 祥一・佐々木 真理・徳永 俊太・橋本 京子
(授業力高度化コース)

1. はじめに

京都連合教職大学院ではカリキュラム改革を実施し、平成26年度入学生より新しいカリキュラムで教学を行っている。カリキュラム改革から2年が経過して新カリキュラムで学んだ院生が修了するにあたり、本稿では、カリキュラム改革の成果と課題を明らかにする。とりわけ第1領域「教育課程の編成・実施に関する領域」、第2領域「教科等の実践的な指導方法に関する領域」と「授業力高度化コースのコース必修科目」の改革に焦点をしぼり、授業力高度化コースの学部新卒院生にとって、新しいカリキュラムが有効に機能しているのかを検討する。

2. カリキュラム改革の概要と特色¹

2-1 共通必修科目

本研究科は定員60名の8割強が学部新卒院生、2割弱が現職教員院生²という構成になっており、全国で最も多くの学部新卒院生が在籍している。連合形態の教職大学院であることから、国立大学の教育学部を卒業した者、私立大学の教員養成のための学科や専攻を卒業した者、一般大学の教職課程において教員免許を取得した者など、院生の学部時代の学習履歴は多様である。したがって、学部新卒院生の教職に関するレディネスが一定でないという実態がある。また、教職に関する理論が理解できていない学部新卒院生がいることがアンケート調査によって明らかになった。このようなことから、共通必修科目の第1領域から第3領域の6科目について、【表1】のように個別の科目を2科目並置するのではなく、【表2】のように各領域で「基礎理論科目」と「実践演習科目」をおき、「基礎理論科目」によって学びのスタートラインを揃えて、カリキュラム全体で理論と実践の往還が行えるようにした³。

また、旧カリキュラムでは、各科目20数名を1クラスとして3クラス編成で授業を行って

¹ 2章は、井上雅彦(2014)「新人教員養成のための教職大学院カリキュラムの理論と課題—授業力高度化コースに焦点をあてて—」『京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報』第3号の4章を加筆訂正したものである。

² 現職教員院生はその多くが学校経営高度化コースに所属しており、授業力高度化コースはほぼ全員が学部新卒院生で構成されている。

³ 第1領域、第2領域のみ示したが、第3領域もほぼ同様の考え方でカリキュラム改革を行った。

【表1】旧カリキュラム

領 域	時 期	1 年次 前期・後期
1, 教育課程の編成・実施に関する領域	単位	各2単位
	クラス編成	各3クラス編成 (a・b・c)
	授業科目名	「特色あるカリキュラム開発と課題 a・b・c」
	内容	カリキュラム開発論
	授業科目名	「教育課程の評価とマネジメント a・b・c」
	内容	カリキュラム(授業)評価論
2, 教科等の実践的な指導方法に関する領域	単位	各2単位
	クラス編成	各3クラス編成 (a・b・c)
	授業科目名	「魅力ある授業づくりの実践と課題 a・b・c」
	内容	授業設計・デザイン論
	授業科目名	「多様な授業形態の実践と課題 a・b・c」
	内容	学習過程・学習活動論

【表2】新カリキュラム

領 域	時 期	1 年次・前期			1 年次・後期
1，教育課程の 編成・実施に関 する領域	分野・単位	基礎理論科目・2 単位			実践演習科目・2 単位
	クラス編成	1 クラス編成			2 クラス編成（a・b）
	授業科目名	「カリキュラム概論」			「カリキュラムの開発と 実践 a・b」
	内容	カリキュラ ム開発基礎 論	カリキュラ ム開発論	カリキュラ ム(授業)評 価論	
2，教科等の実 践的な指導方法 に関する領域	分野・単位	基礎理論科目・2 単位			
	クラス編成	1 クラス編制			
	授業科目名	「教科指導の理論と課題」			
	内容	授業設計・ デザイン論	学習過程・ 学習活動論	授業におけ るICTの活 用	
	分野・単位	実践演習科目・2 単位			
	クラス編成	2 クラス編成（a・b）			
	授業科目名	「教科指導実践演習」			

※上記以外に、現職院生用の「カリキュラムの開発と実践」「教科指導実践演習」を1クラス開講している。

いた。そのため、時間割の関係上、同一科目を前期または後期に集中することができず、前期と後期に振り分けざるを得なかったことから、前期に「教育課程の評価とマネジメント」、後期に「特色あるカリキュラム開発と課題」を学ぶといった系統性のない履修を余儀なくされる場合もあった。

あと一つ加えるなら、旧カリではクラス数が多かったことからフィールドワークの訪問校も必然的に多くなり、科目内容との適合性のある訪問校を探しにくいという弊害もあった。

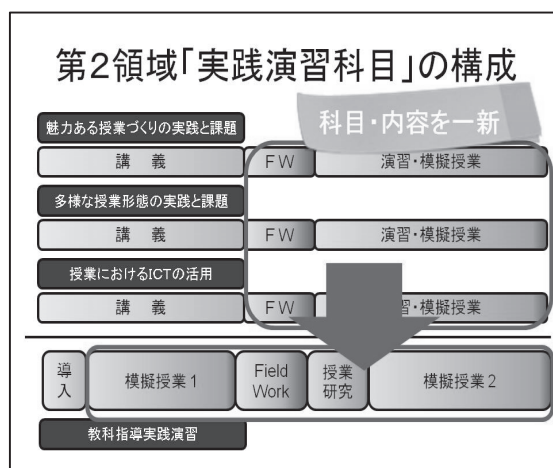
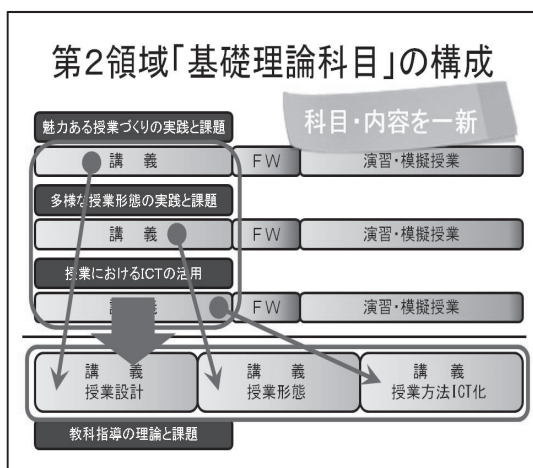
これらの問題を解決するために行った共通必修科目の改革の概要は、以下のとおりである。

○二科目並列型であった共通必修科目を、「基礎理論」を教える科目と「実践演習」を行う科目に再構成する。

- ・「基礎理論科目」は、1クラス編成で60名を対象に講義形式で行い、フィールドワークは実施しない。
- ・「基礎理論科目」を3つのユニット（各授業5回分）に分けて、3人の教員がオムニバス形式で体系的・包括的に理論を講義する。
- ・「実践演習科目」は、「基礎理論科目」の内容をふまえて、実践のあり方を模擬授業や演習、フィールドワーク等を通じて少人数で学ぶ。複数の教員がTTで担当する。

第1領域「基礎理論科目」の「カリキュラム概論」は、最新の学習科学の知見に基づく学習者像、学力論などを概観する「カリキュラム開発基礎論」、カリキュラムの構成原理・類型・構造の理解を目指す「カリキュラム開発論」、カリキュラム評価（授業評価も含む）とカリキュラムマネジメントの意義と方法の理解を目指す「カリキュラム評価論」の3つのユニットで構成した。この「カリキュラム概論」を通して教育課程の「基礎理論」を習得し、後期は「実践演習科目」の「カリキュラムの開発と実践」へと展開する。「カリキュラムの開発と実践」の前半5回は各教科の単元計画を持ち寄り、単元構成について学ぶ。後半の10回は教科の枠をこえた現代的なテーマを取り上げ、総合的な学習の時間のカリキュラム開発と運営の実際を学ぶ。

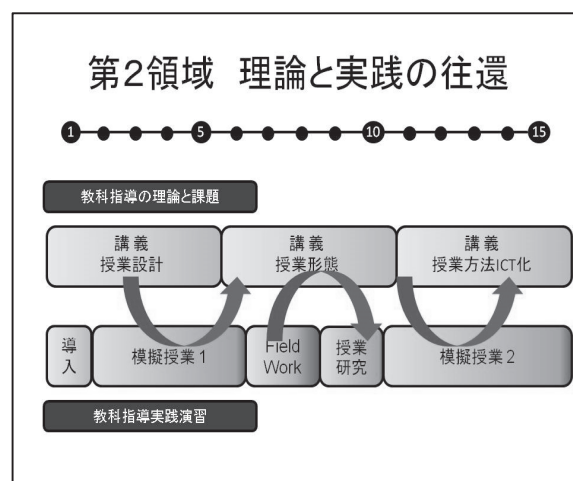
第2領域では、9月に実施される「教職専門実習Ⅰ」に向けて、「基礎理論科目」と「実践演習科目」を前期に配置している。「基礎理論科目」の「教科指導の理論と課題」は、「授業設計・デザイン論」「学習過程・授業形態論」「授業におけるICT」の3つのユニットで構成し



ている。「授業設計・デザイン論」は授業の基本構造と授業デザインの方法の理解を、「学習過程・授業形態論」は学習過程・活動の類型や学習者への支援のあり方の理解を、「授業におけるICTの活用」は学習指導過程のなかでのICTの有効活用の理解を目指す。

同時並行して実施する「教科指導実践演習」では、指導案の作成、模擬授業をとおして、一単位時間の授業を計画・実施するための基礎的能力を実践的に育成する。

この共通必修科目のカリキュラム改革は、「教職大学院におけるカリキュラムイメージについて（第二次試案）」（科目における「理論と実践の融合」）に示されている「それぞれを教員・科目が役割分担するのではなく、すべての教員・科目が実践と理論とを架橋する発想に立つ必要がある」という部分に抵触する可能性をもつ。しかし、共通必修科目を「基礎理論科目」と「実践演習科目」に分け、共通必修科目のなかで「理論と実践の融合」をはかるという考え方をしている。



2-2 コース必修科目

授業力高度化コースでは、次のコース必修科目を設けて、共通必修科目を発展させようとした。さらに、「教職専門実習Ⅰ・Ⅱ」と関連させて理論と実践の融合を目指している。

■共通必修科目第1領域（教育課程）との関連科目

◇現代的教育課題の教材化と授業実践（M2後期）

M1後期に配置された共通必修科目「カリキュラムの開発と実践」が、各教科の単元構想と現代的教育課題のカリキュラム作りに主眼をおいた巨視的なものであるのに対して、「現代的教育課題の教材化と授業実践」は、現代的教育課題の教材開発と授業展開を検討する微視的な科目である。M2後期に教職大学院の学びの仕上げとして、現代的教育課題を扱った自主教材を開発して、それを用いて授業ができることを目指す。

■共通必修科目第2領域（教科指導）との関連科目

◇授業コミュニケーション論（M1前期）⁴

◇授業力高度化実践演習（M1後期）⁵

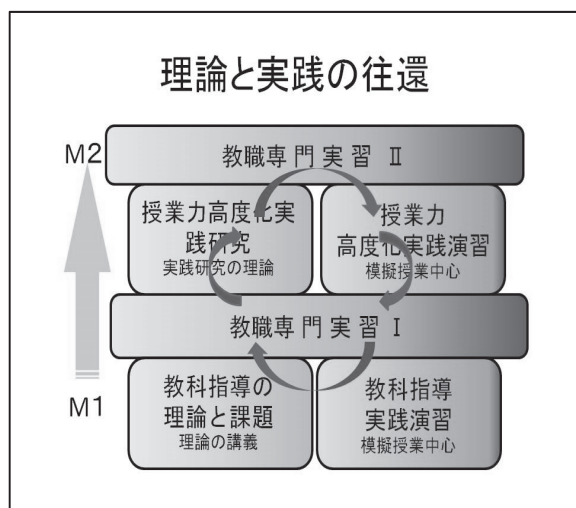
◇授業研究の理論と実践（M1後期）

◇授業力高度化実践研究Ⅰ（M1通年）⁶

⁴ 旧科目「授業におけるICTの活用」。教師と子ども、そして子ども同士の授業コミュニケーションに焦点化して、FW、模擬授業を行う。

⁵ 旧科目「授業における評価の実践と課題」。単元を見通して授業を設計する力の育成を目指した模擬授業中心の科目。約20名の授業力高度化コースの学部新卒院生を3つのグループに分けて実施する。

⁶ 新設科目。M1のゼミに相当する。前期はアカデミックライティング、後期は修了論文の理論的な枠組みを構想する。



◇授業力高度化実践研究Ⅱ（M2後期）

M1前期には、共通必修科目「教科指導の理論と課題」を通して、授業をデザインし、展開する理論を学ぶ。同時に共通必修科目「教科指導実践演習」とコース必修科目「授業コミュニケーション論」で模擬授業などを行い、実践的に授業力の向上を目指す。そして、これらの科目で身につけた授業力を夏期休業中に実施される3週間の「教職専門実習Ⅰ」へとつなげていく。

M1後期は、「教職専門実習Ⅰ」で見えてきた課題の克服を目指す。その鍵となるのが「授業力高度化実践演習」である。この科目は、単元を見通して授業を設計する力を身に付けることを目標としている。受講生を校種別に分けたり、文系・理系科目とに分けたりして少人数で教材研究、模擬授業、授業研究を行う。実務家教員、研究者教員の別なく多くの教員が得意分野を生かして指導にあたる。同時に「授業研究の理論と実践」において授業の実施者としてではなく、第三者として授業を相対化して見る視点を身につける。このM1のカリキュラムを通して授業力を高度化してM2前期に7週間の「教職専門実習Ⅱ」を迎える。「授業力高度化実践研究Ⅰ・Ⅱ」（ゼミ）については次節で詳述する。

2-3 修了論文

本研究科においては修了論文の提出を義務づけている。旧カリではM2の後期からゼミに相当する科目を設けて修了論文指導を行ってきた。しかし、この短期間では「教職専門実習」をふまえて研究を行い、修士課程のまとめにふさわしい論文を書けないという問題があった。そこで今回のカリキュラム改革では、M1通年で展開する「授業力高度化実践研究Ⅰ」という科

【表3】

M1 前期	夏期休業	M1 後期	M2 前期	M2 後期
「授業力高度化実践研究Ⅰ」				「授業力高度化実践研究Ⅱ」
アカデミックライティングの技法をマスターする		実習Ⅰで明確になった課題について文献を読み、解決のための仮説を立てる		実習Ⅱで検証した結果を修了論文にまとめる
	「教職専門実習Ⅰ」		「教職専門実習Ⅱ」	
	課題の明確化 (約15日間)		仮説の検証 (約35日間)	

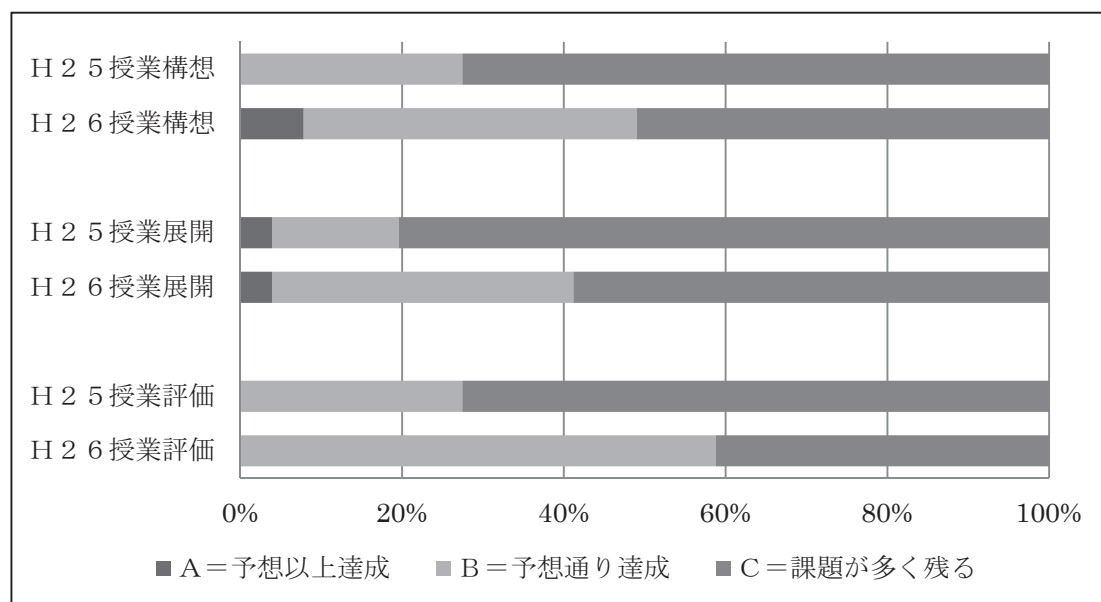
目を新設して、【表3】のように「授業力高度化実践研究Ⅰ・Ⅱ」と「教職専門実習Ⅰ・Ⅱ」とを連動して修了論文の完成へと向かう体制を取った。具体的には、「授業力高度化実践研究Ⅰ」の前半5回で、アカデミックライティングの技法を身につける。後半10回は「教職専門実習Ⅰ」で浮かび上がった課題について文献を読み、解決のための仮説を立てる。「教職専門実習Ⅱ」においてその仮説を検証し、M2後期の「授業力高度化実践研究Ⅱ」で論文としてまとめていくというように関連をはかった。こうして実習と関連させた2年間の実践的な研究指導を行い、修了論文の充実をめざした。

これまで述べてきたように、「基礎理論科目」や「授業力高度化実践研究」（ゼミ）で学んだ理論的なことと、「実践演習科目」や「教職専門実習」、「フィールドワーク」等で学んだ実践的なことが有機的につながり、院生の学修において、理論と実践の往還が今まで以上に計画的に実現できることを目指した。

3. カリキュラム改革の有効性の検討

3-1 H25（旧カリ）とH26（新カリ）「教職専門実習Ⅰ」のアンケート調査の比較

学校現場における教育実践に、教職大学院での学びが有効に機能しているのかを考察するために、旧カリキュラムと新カリキュラムで学んだ院生の「教職専門実習Ⅰ」に対する自己評価を比較した。授業力の評価観点として、①授業構想、②授業展開、③授業評価の3項目を自己評価させた。その結果は次表のとおり。



授業力の3項目について、A=予想以上の達成、B=予想通りの達成と自己評価した割合は、新カリキュラムで学んだ院生が際だって高くなっている。つまり、「教職専門実習Ⅰ」において、授業構想、授業展開、授業評価のどの面においても、旧カリキュラムよりも新カリキュラムで学んだ院生の方が、達成感が高かったことが読み取れる。

3-2 「教職専門実習」連携協力校への聞き取り調査

次に「教職専門実習」の指導担当教諭に聞き取り調査を行った。連携協力校で旧カリキュラムと新カリキュラムで学んだ院生両方を担当した4校の指導教員に、実習生の授業について、「指導案の作成」「目標を踏まえた授業展開」「児童・生徒主体の授業構成」という3つの観点で回答を得た。ほぼプラス評価であったため、その内容を示す。（傍線は稿者による）

【設問1】 基本的な要素を踏まえて、指導案作成が院生自身の力でできたか

- ☐（新カリの院生は）指導案作成に関して、大学院で指導されていたようで、授業の構成要素が明確に記述されていた〈I中学校〉
- ☐指導案作成力は向上している〈U中学校〉
- ☐指導案作成は院生自身の力で作成できた。授業数が増えても自身の力で（指導案を）仕上げている〈O小学校〉
- ☐修了生、M2院生とも高い資質と見識の下で自分の研究に合わせた指導案作成を行っていた〈附属中〉

【設問2】 学習目標を踏まえた授業が展開できたか

- ☐（本時の目標に対して）授業展開時に導入での意欲付けや、発問や指示の場合も意識していたように思う〈I中学校〉
- ☐限られた時間の中で、発問や指示の在り方を練るのは難しいが、ほぼねらいを意識した授業展開であった〈O小学校〉
- ☐双方とも意欲付けや発問、指示等に関して未熟さを感じることはなかったが、ややM2（新カリ）の方が研究テーマに積極的に取り組んでいた〈附属中〉

【設問3】 講義形式ではなく、児童・生徒の発言を活かした授業になっていたか

- ☐生徒の主体的な学習活動になるように、授業展開や学習形態にも工夫がなされていた。また、どの院生も視聴覚機器の活用ができていた〈I中学校〉
- ☐グループ活動や話し合いなどを取り入れて展開を工夫し、省察会でもその有効性を議論していた〈O小学校〉
- ☐修了生、M2院生双方ともに視聴覚機器の扱いに堪能であり、積極的にこれを活用した。また、生徒を活かす授業についても様々な方法を模索し実践していた〈附属中〉

【設問1】 基本的な要素を踏まえて、指導案作成が院生自身の力でできたかでは、「授業の構成要素が明確に記述」、「指導案作成力は向上」、「自分の研究に合わせた指導案作成」等のプラス評価をされた。【設問2】 学習目標を踏まえた授業が展開できたかでは、「発問や指示の場合も意識していた」、「ねらいを意識した授業展開」等のプラス評価をもらった。【設問3】 講義形式でなく、児童生徒の発言を活かした授業になっていたかでは、「主体的な活動になるように工夫」、「グループ活動や話し合い活動を取り入れて…」、「生徒を活かす様々な方法を模索」等のプラス評価をされた。このように、連携協力校の指導教員の評価は、新カリキュラムで学んだ院生の方が高く、新カリキュラムが有効に機能していることが示唆された。

3-3 M2とM1へのアンケート調査

さらに「教職専門実習」を終えたM2とM1へアンケート調査（生徒指導力高度化コースの院生も含む）を実施した。M2に対してはQ1とQ3で「教職専門実習Ⅰ・Ⅱ」において役立った科目を、M1に対してはQ2で「教職専門実習Ⅰ」において役立った科目を尋ねた。

【調査内容】

Q1. 「教職専門実習Ⅰ」で特に役立った前期履修科目とその内容

※対象：M2=42名 時期：H27, 7月実施

A1. ①「教科指導実践演習」（共通必修科目） 約79%

- 授業力（39%） • 授業案作成（12%） • 指導案作成と授業改善（9%）
- ②「言語活動を重視した授業の創造」（選択科目） 約34%
- ③「授業コミュニケーション論」（コース必修科目） 約31%
 - 授業力（22%） • 授業内コミュニケーション（13%）
- ④「問題行動改善のための事例研究」（選択科目） 約28%
- ⑤「教科指導の理論と実践」（共通必修科目） 約10%
- ⑥「カリキュラム概論」（共通必修科目） 約7%

Q2. 「教職専門実習Ⅰ」で特に役立った前期履修科目とその内容

※対象：M1=46名 時期：H27, 9月実施

A2. ①「教科指導実践演習」（共通必修科目） 約74%

- 授業力（30%） • 授業案作成（15%） • 指導案作成と授業実践（15%）
- ②「望ましい集団作りの実践と課題」（コース必修科目） 約69%
- ③「授業コミュニケーション論」（コース必修科目） 約65%
 - 授業力（42%） • 授業改善（8%） • 指導案作成（8%）
- ④「言語活動を重視した授業の創造」（選択科目） 約34%
- ⑤「教科指導の理論と実践」（共通必修科目） 約11%
- ⑥「カリキュラム概論」（共通必修科目） 約7%

M2に「教職専門実習Ⅰ」で特に役立った前期履修科目とその理由を尋ねた結果、79%にあたる院生が「教科指導実践演習」を挙げ、この科目が授業力の向上や指導案作成時に役立ったと回答している。このように共通必修科目の「実践演習科目」が学校現場ではほとんどの院生が役立ったと実感していることが理解できる。2番目に挙げたのが選択科目の「言語活動を重視した授業の創造」。3番目は「授業コミュニケーション論」で31%の院生が役立ったと回答した。次に10%の院生が「教科指導の理論と実践」、7%が「カリキュラム概論」といった「基礎理論科目」を挙げていることに注目すべきである。学校現場において「基礎理論科目」

の重要性を認識したことがわかる。

さらにM1に対しても「教職専門実習Ⅰ」で特に役立った前期履修科目を尋ねた結果、M2と全く同様に、74%と最も多くの院生が「教科指導実践演習」を挙げた。次は生徒指導高度化コース院生がコース必修科目「望ましい集団作りの実践と課題」を挙げ、3番目には「授業コミュニケーション論」と回答した。やはり「実践演習科目」が現場で役立ったと言えよう。また、M2と同様に「教科指導の理論と実践」、「カリキュラム概論」といった「基礎理論科目」が役立ったと回答したM1院生が10%前後いた。授業モデルを参考にしたり、カリキュラムという大きなくくりで授業を捉えたりするうえで、「基礎理論科目」が現場で有用であることがわかる。

M2、M1とも「教職専門実習Ⅰ」で特に役立ったと実感している科目の筆頭は「教科指導実践演習」であった。一般大学を卒業した院生には、学部時代に教育実習に2週間しか行かなかった者もいる。このような院生が多く入学してくる連合教職大学院にとって、指導案の書き方から一単位時間の授業をどのように展開するのかを実践的に学べる「教科指導実践演習」という科目を設けたことは意味があり、「教職専門実習Ⅰ」の前に配置することの有効性が見えてくる。この科目は、模擬授業中心の科目（15分の模擬授業→フィールドワーク〈実際の授業を見学〉→改善→15分の模擬授業）で、授業力、生徒指導力の学部新卒院生50数名を、小学校、中学校・高等学校の文系・理系の3つのグループに分けて、8～10名を実務家・研究者教員いずれかが一人で担当する。

また、この科目を補強するコース必修科目「授業コミュニケーション論」も有意義な科目として挙げられている。この科目は、授業における教師と子ども、子ども同士の授業コミュニケーションのあり方を探るものである。「子どもが学ぶ授業」とはどんなものかという講義を受けて少人数の院生が模擬授業を行う。教師役、子ども役、参観役を決めて、教師役は教材研究と模擬授業について、子ども役は模擬授業の対象学年の発達段階の子どもがつまずきやすいところについて、参観役は授業コミュニケーションの分析を担当し、事後に振り返りを行うという内容である。

Q3. 教職専門実習Ⅱで特に役立った前年度後期履修科目とその内容

※対象：M2=42名 時期：H27 7月実施

A3. ①「授業力高度化演習」（コース必修科目） 約70%

- 授業づくり（26%）
- 授業改善（26%）
- 指導案作成（13%）

②「授業研究の理論と実践」（コース必修科目） 約50%

- 授業づくり（17%）
- 授業実践、指導案作成、授業観察（各9%）

③「カリキュラム開発と実践」（共通必修科目） 約33%

- 全体計画（12%）
- 単元構成（10%）

M2に対して「教職専門実習Ⅱ」で特に役立った前年度履修科目を聞いた結果、約70%の

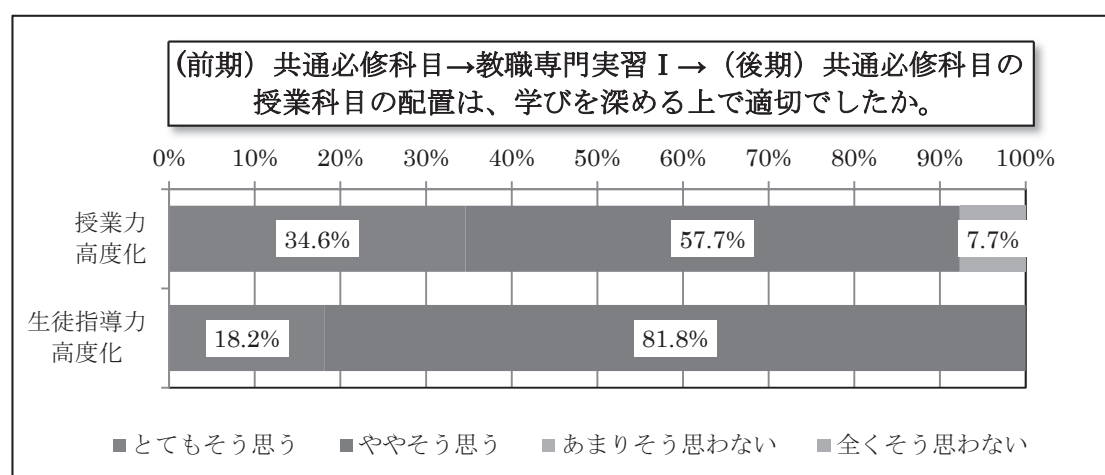
院性がコース必修科目「授業力高度化演習」を挙げた。この科目は単元を見通して授業を設計できる力をつけるのが目的である。これも模擬授業中心の科目（実習Ⅰの振り返り→改善案→15分の模擬授業→単元作成→検討会→30分の模擬授業）である。約25名の授業力高度化コースの学部新卒院生を小学校、中学校・高等学校の文系・理系に分けて、5名程度を研究者と実務家教員がTTで指導する。

続いて半数の院生が「授業研究の理論と実践」が役立ったと回答しており、とりわけ授業づくりや授業改善、指導案作成などに役立ったと回答している。この科目は、教員による「授業研究（会）」の意義と方法を体験的に学び、同僚性の中で互いに職能を向上させる能力を身に付けることを目標とした授業である。附属中学校でフィールドワークを実施するが、実施前に指導案を検討する。実施後には検討会を持ち、院生の考察や疑問を授業者の視点から評価する。3番目の「カリキュラム開発と実践」は、単元計画の作成時に役立ったと回答している。

このように単元全体を俯瞰して授業を構想したり、自らの授業を客観的に観察し、改善を図っていくことを意図した科目が「教職専門実習Ⅱ」では役立ったようである。

では、これらの科目の配列は有効に機能したのであろうか。【表4】は、新しいカリキュラムで学んだM1とM2へのアンケートの結果である。授業力高度化コースの2名（7.7%）以外は、共通必修科目（基礎理論科目）→「教職専門実習Ⅰ」→共通必修科目（実践演習科目）という配置が学びを深める上で適切であったと回答している。

【表4】



さらにこれらの科目が具体的にどのように関連し合って、学部新卒院生の授業力を高度化していったのかを、3名の事例をもとに次項で検討する。

3-4 新カリキュラムで学んだ院生へのインタビュー

多様な学習履歴をもつ3名の学部新卒院生へのインタビュー調査を実施した。対象者と時期は以下のとおり。

【対象者】

- ☐一般大学の教員養成学部卒業し、小学校教員採用試験に合格して入学してきたAさん
- ☐一般大学の教員養成学科を卒業し、小学校教員をめざすBくん
- ☐一般大学の文学部卒業し、教職大学院において小学校教員免許を取得したCさん

【時期】

- ・第1次インタビュー……M2前期終了時
(平成27年8月7日 約40分)
- ・第2次インタビュー……M2後期終了時
(Aさん…平成28年2月9日 約40分, Bくん・Cさん…2月23日 約40分)

3-4-1 Aさんの事例

父親も姉も教員という家庭に育ったAさんは、一般大学の教員養成学部に進学した。幼稚園、小学校、中学校・高校（国語）、司書教諭の免許を取得し、200単位以上を修得して卒業したAさんは、学部時代に「理論的なことを多く学んだ」と言う。Aさんは、小学校の教員採用試験に合格したが、実践的なことを学びたいと思い、大学院猶予制度を使って本研究科へ入学してきた。

Aさんは選択科目だけでなく他研究科受講も行い、積極的に学んだ。M1前期の共通科目（基礎理論科目）は学部時代の既習内容が多く、学んだ「内容を確認しながら聞いていた」と話す。しかしながら、共通科目（実践演習科目）の「教科指導実践演習」において自分の模擬授業を点数化したり、相互評価したりしてじっくり見てもらったのは初めての経験だったと話している。また、コース必修科目「授業コミュニケーション論」でも、学部時代にはあまり行わなかった模擬授業の振り返りが良かったと述べている。このように、Aさんは「基礎理論科目」で学部時代に身につけた理論を確認しつつ、「実践演習科目」で実践的に授業力の向上を図っていった。9月になり「教職専門実習Ⅰ」に臨んだAさんは、修了論文のテーマを意識して実習を行い、その成果を学会で発表した。ここでも修了論文作成のための理論と実習という実践の往還が図られたと言えよう。

M1後期になって履修したコース必修科目「授業力高度化実践演習」では、小学校教員を志望するメンバー12名で「教職専門実習Ⅰ」の授業を振り返りを行い、それを改善して模擬授業を行うなかで単元全体の「見通しをもって授業を行う」重要性に気づく。それは共通必修科目第1領域の「カリキュラム開発と実践」の影響もあったと話す。このように共通必修科目第2領域「教科指導実践演習」の目標であった一単位時間の授業づくりから、コース必修科目「授業力高度化実践演習」の目指す単元全体を意識した授業づくりという流れが有効に機能し、それに共通必修科目第1領域の「カリキュラム開発と実践」が影響を与えながら、課題意識が変化したことがわかる。M2の「教職専門実習Ⅱ」において、Aさんは学級開きからスタートして単元すべての授業を任せられた。ここでも「見通し」の必要性を再確認することになる。

「教職専門実習Ⅱ」から戻ってきたAさんは、週5日非常勤講師として小学校に勤務する。ボランティアとして学校に入るのとは違って、「学校の一員として働く充実感」を得ることができたと話す。毎日非常勤が終わると大学に戻り5～6時間程度修了論文の作成に打ち込んだ。「限られた時間で充実して書けた」と言う。学部の卒業論文は文献調査が主であったが、修了論文は実践と理論を結びつけて書いた「愛着のある論文」であったと言う。

Aさんにとって、教職大学院は「理論を自分のものとして使えるようにする場」であった。現場に出て「研究者マインドをもって教壇に立つ」こと、「教えながら研究ができる」ことが楽しみだと述べている。この言葉には、「学び続ける教師」としての萌芽が見られる。Aさんは、新カリキュラムのもと、学部時代に身につけた理論や修了論文作成のための理論と、教職大学院での実践的な学びとを往還しながら、授業力を向上させたことが示唆される。

3-4-2 B さんの事例

中学校3年生時の担任の影響で教師という職業を意識し始めたBさんは、一般大学の教員養成学科に入学する。学部時代に教育理論の「基礎の基礎を広く浅く学んだ」と話すBさんは、小学校、中学校・高校（社会）の免許を取得した。大学の附属小学校で2週間、母校の国立大学附属の小学校、中学校で5週間、計7週間の教育実習を経験した。しかし、先進的な授業について学べたものの、オーソドックスな授業をどのように展開するのかがわからなかったと述べる。そこで実践的なことを学び、授業のスキルアップを図りたくて教職大学院へ進学した。また、Bさんの卒論「『厳しい教育環境にある家庭』の子どもの『学力』をいかにして伸ばすか」は、学部長優秀賞を受賞している。この卒業論文で構築した理論を実践につなげるすべを知りたくて、教職大学院へ入学したとも言う。

教職大学院の共通必修科目（基礎理論科目）は既習の内容であったため、興味を引かなかったようである。しかし、共通必修科目（実践演習科目）の「教科指導実践演習」では、授業の構成、効果的な発問や説明の仕方など、教育実習で足りなかった実践的なことを多く学べた。また、コース必修科目「授業コミュニケーション論」は、実践的な内容であり、教師の立ち位置であるとか板書の方法などを学べて効果的だったと述べる。これまで実践的なことを学んでこなかったBさんに、教職大学院の「実践演習科目」が有効に機能したことがわかる。

9月の「教職専門実習Ⅰ」は、初めての公立学校での実習であった。附属とは違い、多様な学習者にどのように対応するのか悩み、自分の授業をビデオ撮りして何度も振り返ったと話す。またこの頃、小学校のボランティアに行き現実を知り始める。学力的に厳しい学校であったが、学部の卒業論文にまとめた貧困や格差の問題は、たやすく扱えるものではないことに気づく。修了論文のテーマをもっと絞り、テーマを変更する必要性を感じて、修了論文のテーマを「公共圏の形成」の問題へと変更する。頭の中で考えがちなBさんは少しずつ現実を踏まえて考えることの重要性がわかり始める。M1後期から始まったコース必修科目「授業力高度化実践演習」では、修了論文のテーマを踏まえて、単元を意識して小学校4年生のゴミ問題

を扱う模擬授業を行った。また、説明、発問といった基本的な授業技術も意識したと話す。

M2になって「教職専門実習Ⅱ」へ行き、「授業力高度化実践演習」の内容を生かして修了論文のテーマとリンクさせながら単元を構成した。ここでも学習者にどのように対応するのか生徒指導の良い勉強になった。授業のなかで生徒指導をする必要性を強く感じたと言う。

M2後期になって受講したコース必修科目「現代的教育課題の教材化と実践」では、総合的な学習の時間の教材を開発して、授業を行った。カリキュラムを具体化する過程で見えてくるが多かったと話す。カリキュラムをリアリティーをもって実践に落とし込んでいくことの難しさを感じるが多かったと話す。そのとき現職教員院生のアドバイス（実践知）がとても有効であった。現実的に考えて、行動することの難しさとやり方を学んだと言う。

教員採用試験が終わった頃から学会発表の準備に取りかかったが、それは同時に修了論文の準備でもあった。この9月から10月の時期が、2年間で精神的にも肉体的にも一番しんどい時期であったと話す。興味があることを焦点化していき、それが実習という限られた状況のなかでどの程度検証できるのか悩んだ。自分の課題意識、子どもや学校の実態、アプローチの仕方など修了論文は多くのことを考えるきっかけとなったという。

Bくんは、卒業論文で構築した理論を検証するという入学当初の目的は達成できなかったけれど、教職大学院の2年間は実態を見ながら現実的・具体的に考えることを学んだと述べる。また、「自分の理論を実践につなげて考えられるようになったことは良かった。自分の力が立体的になった」と話す。学部から現場にそのまま出ていたら、「現実を知らず、もたなかっただろう」と言う。Bくんにとって教職大学院のカリキュラムは、学部で学んだ理論や修了論文の理論を、どのように実際の現場で実践へと落とし込んでいくのかを学ぶのに供したように見える。

3-4-3 Cさんの事例

中学時代に友人から「先生になったら」と言われて教師という職業を意識し始めたCさんは、一般大学で教職課程を履修してから教師になるという意思を固めた。文学部を卒業し、中学・高校（国語）の免許を取得したが、学部時代の授業の内容は「何も身についていない」という実感をもっていた。そこで自分が教師になるためには教職大学院へ進学するのがよいと考えた。

入学後も周りの友人に対してコンプレックスを抱いていたが、小学校の教員免許を取得するために、学部も含めて多くの授業を受けた。M1前期の共通科目（基礎理論科目）「教科指導の理論と課題」は知らないこと、わからないことが多くあった。コース必修科目「授業コミュニケーション論」においては、授業でICTを使うこと自体が驚きであった。また、他の院生の授業を見て、こんな工夫があるのだと多くのことを学んだ。共通科目（実践演習科目）「教科指導実践演習」では、一斉授業がスタンダードだという概念を打ち壊された。他の院生の授業を見て、自分も取り入れたいと思った。この科目で指導案の基本を学ぶことができて、少しだ

け自信がついたと言う。

9月の「教職専門実習Ⅰ」では、黒板の使用、教具、導入の工夫、授業時の明るさについては評価されたものの、授業のねらいがあやふやで授業展開についてはコメントがもらえなかった。しかし、同時期に小学校免許取得のためのセミナーが週1コマ×4週間実施され、展開部の模擬授業を2回行った。そこで授業作りに自信がもてたと話す。

M1後期のコース必修科目「授業力高度化実践演習」では、修了論文を意識して模擬授業を行ったが失敗する。しかし、M2の4月に行った「教職専門実習Ⅱ」では、修了論文のテーマを意識して授業展開や授業形態を考え、単元構想を練ることができた。9月になり小学校免許取得のために教育実習に2週間「教職専門実習Ⅰ・Ⅱ」と同じ学校に行った。この時は「教職専門実習Ⅱ」で学んだことを生かして、気楽にとんとん拍子で実習は進んだ。

9月頃から修了論文のデータを整理し始めたが、10月・11月は考えがまとまらず苦労した。12月になってやっと全体像が見えてきて論文作成に没頭した。この修了論文の作成を通して、シンプルに分かりやすくまとめることを学んだ。また、論を立てるというのは、背景－目的－方法－結果－考察と筋を通すことだということも学んだ。さらに、我慢して頑張る力もついたと言う。これらは、「今後も役立つと思う」と述べている。

Cさんは「学部時代のまま現場に出ていたら怖いことになっていた」。そして「教職大学院で学んだ理論は、実践場面を相対化する目となった」と話す。Cさんの場合、小学校免許取得のための授業やセミナーで、学部時代に不足していた力を補いつつ、教職大学院のカリキュラムで理論と実践を往還しつつ授業力を高めたと言えるであろう。

3-4-4 事例研究の成果

この3名の事例から、新しいカリキュラムは共通科目の「基礎理論科目」と「実践演習科目」間、またカリキュラム全体で「理論と実践の往還」を図り、授業力の向上に資するものであることが示唆される。

4. カリキュラム改革の成果と課題

これまでの考察から明らかになったカリキュラム改革の成果と課題をまとめるとともに、カリキュラム改革に関連するその他の成果と課題を述べてまとめたい。

■基礎力育成から授業力高度化への取組

【成果】

- 1) 共通必修科目第1領域では、カリキュラム基礎理論・カリキュラム作成理論・カリキュラム評価理論→単元計画（演習）→カリキュラム作成（演習）という流れができた。
- 2) 共通必修科目第1領域「カリキュラムの開発と実践」と、コース必修科目「現代的教育課題の教材化と授業実践」の接続によって、M1で「総合的な学習の時間」のカリキュラム作

成を行い、M2で「総合的な学習の時間」の単元を構想し、教材を開発して1時間の授業案を作成するという流れができた。

3) 共通必修科目第2領域では、「教科指導の理論と課題」（基礎理論科目）と「教科指導実践演習A」（実践演習科目）とで理論と実践の往還を図り、「教職専門実習Ⅰ」に送り出す準備ができた。

4) 共通必修科目第2領域「教科指導実践演習」と、コース必修科目の「授業コミュニケーション論」「授業力高度化実践演習」など、模擬授業を伴う科目を差異化し、授業力の何を高度化するのかを明確にできた。

5) 共通必修科目第2領域「教科指導実践演習」、コース必修科目「授業力高度化演習」において、小・中・高という校種や教科の区別をして授業をすることは効果的であった。

■ 2年のスパンで行う論文指導

【成果】

旧カリキュラムで学んだ院生の修了論文では、2割程度が「教職専門実習Ⅱ」の授業をもとに仮説の検証を行っていたが、新しいカリキュラムで学んだ平成26年度入学の院生の修論は約7.5割が「教職専門実習Ⅱ」の授業をもとに仮説の検証を行っていた。また、授業アンケートの「教職専門実習Ⅱ」を修了論文にうまく結びつけることができたかという問いに、「とてもそう思う」（45.8%）「ややそう思う」（50%）と回答した院生が95%を超えている。

「『教職専門実習Ⅰ』で課題を見つける→『授業力高度化研究Ⅰ』（ゼミ）で仮説を立てる→『教職専門実習Ⅱ』で仮説の検証をする→『授業力高度化研究Ⅱ』（ゼミ）で修論にまとめる」というカリキュラム改革の流れを、オリエンテーション、ゼミ、セミナー等を通して院生に十分理解させた効果であろう。

また、昨年までは、課題をもって「教職専門実習Ⅱ」に臨んでも、実習校で実践させてもらいにくい現実があった。拡大実地教育運営委員会や教職専門実習中に訪問して、管理職に「教職専門実習」の趣旨の徹底を図った。さらに、2月～3月末に翌年度の校務分掌等がおおよそ明らかになった時点で、実務家教員が実習校に出向き、院生の希望を実習校に伝えるなどして、かなり希望を聞いてもらえるようになってきた。

【課題】

1) 「教職専門実習Ⅰ」で明らかになった課題が、研究のテーマとしてふさわしくないものや、「教職専門実習Ⅱ」で検証が不可能なものが見受けられる。2月、3月の実務家ゼミと研究者ゼミで研究に値する課題へ精選していく必要がある。その場合、実習校において担当する学年や単元が明らかにならないと詰めていくのが難しい。2月の拡大実地教育委員会で実習校に希望を聞いてもらえるように働きかけていく必要がある。

2) 論文の作成がスムーズにいかない理由として、教育学研究科と比較して教職大学院が多忙であり、論文の作成に集中できないということ、特に採用試験があるM2の7月、8月が多

忙であり、論文作成に順調に移行できないことがある。M1後期も授業が多く、「教職専門実習Ⅰ」における課題に対して理論的仮説を立てることが難しいという問題もある。入学当初から採用試験に合格している者に加え、M1の時点で多く採用試験に合格させることによってM2後期に修論に没頭させることができる。小学校の2種免の取得をめざす者以外は積極的にM1で合格を目指すように指導する必要がある。

■フィールドワークの削減

【成果】

かつては1コマで3回フィールドワークに行く科目もあり、院生は週に4～5日フィールドワークに出かける時もあった。H24年度にかなりフィールドワークを減らし、年間40回程度になったが、それでもフィールドワークの時期が集中する、費用の負担が大きいという声が多かった。新しいカリキュラムになって共通科目のクラス数が削減されたこともあり、フィールドワークは年間20回程度とかなり精選された。アンケートでは今のフィールドワークの回数が「ちょうどよかった」と回答した院生が83,6%という結果であった。また、フィールドワークを減らしたことにより、科目内容とフィールドワーク先の学校が合致して、「とても満足」(29,1%)「やや満足」(67,3%)が95%を超えている。

■現職院生と学部新卒院生の協同

【課題】

新しいカリキュラムになって、学部新卒院生と現職院生が共に学ぶ機会がかなり減った。カリキュラム改革前は、学部新卒院生と現職院生がともに学ぶ機会が「このままで良い」が84,6%であったが、カリキュラム改革後では、「もっと一緒になる授業があると良い」が61,8%となり、より多くの院生は現職院生と学部新卒院生が共に学ぶことを求めている。

これから教育現場はベテラン教員がいなくなり、学部新卒院生は修了後すぐにミドルリーダーとして他の教員を指導する機会が増えてくる。また、現職院生にとっても若い教師と協同して仕事をする場面が多くなる。このことから、学部新卒院生と現職院生が協同して学ぶ場が必要であり、新カリキュラムのなかで、協同する場を意図的に仕組んでいくという方法を模索していくべきである。そのヒントになるのが、現職院生を対象とした共通必修科目「教科指導実践演習B」での試みである。希望者を募り、現職院生の模擬授業を多くの学部新卒院生が見にくるようにしている。今年度は20～30人の学部新卒院生が模擬授業を参観に行き、刺激を受けた。また、授業力高度化コースに現職院生の入学者が増加する傾向があり、これを促進する方策を考えることも大切であろう。